



Title	古墳出現前夜の饗宴と土製支脚
Author(s)	中久保, 辰夫
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 161-170
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105038
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古墳出現前夜の饗宴と土製支脚

中久保 辰 夫

はじめに

土製支脚とは、炉中に複数個体を並び据えて、甕・鍋を火にかけるための土製の調理補助具である（小林 1941）。同形の調理補助具は日本列島のみならず、河姆渡遺跡など新石器時代の長江下流域杭州湾南岸（浙江省文物考古研究所（編）2003）や西アジアにも類例がある（藤井 1983）。またフィリピン北部ルソン島のカリंगाで民族考古学的検討もなされている（Skibo 2013 : pp. 98-99）。支脚は丸底の土器を保持するだけでなく、燃料の加除に易く、強火／弱火の加減ができる。「あれば便利」と発想も安易で、粘土塊を成形するだけとつくりやすい。しかし、すべての時代にどここの地域でも出土する考古資料ではない。

日本列島では弥生時代後期後半から古墳時代前期の西部瀬戸内（山内 2001）、古墳時代後期から奈良時代の山陰地域（岩橋 2004）で土製支脚が使用される。前者の時期では「直置き」から「浮き置き」へという煮沸形態の変化を示すものとして注目されてきた（西川 1983、深澤 1995）。本論では、弥生後期から古墳前期の西日本を対象に、土製支脚の使用とその背景について、煮沸形態の変化と関連付けて検討を加えてみたい。

1. 研究史と問題の所在

土製支脚の研究史をふりかえり、その問題点を明らかにしたい。

基礎となる研究 土製支脚の基礎研究は小林行雄、大橋信弥によって確立した（小林 1941、大橋 1978）。小林は、犬埴輪などと呼称されてきた土製支脚を、被熱痕跡や出土状況から調理補助具として評価した。そして、炉からカマドへ変化する過渡的な資料として位置付けた。

大橋は土製支脚を集成・分類し、北部九州を中心に分布する筒形の支脚（大橋分類Aタイプ）が祖形となり、様々な形状の土製支脚が出現する点を明らかにした。土製支脚各型式の時期的、系譜的關係性を明らかにした点で学史的な意義がある。

研究の進展とその問題点 その後、集成や研究が進展し、次の2点が明らかになった。

1 点目は、筒形の支脚（大橋分類Aタイプ）には被熱痕がみられない個体が多く、土器の設置方法から考えても、調理補助具として考えにくいという指摘である（杉井 2004）。しかし、

大橋が説くように、この支脚を祖形とするならば、調理補助具としての用途がどの時期から認められるのか、他の支脚とどのような関係にあるのかといった点を再検討する必要がある。

2点目は、弥生後期から古墳前期にかけて、土製支脚が北部九州から西部瀬戸内に分布することが判明した（大久保 1996、山内 2001、梅木 2001）。また山陰の土製支脚は体部が中実で、盛行時期は古墳後期後半から奈良時代であることが明確となった（岩橋 2004）。

研究が進んできたことによって、「なぜこの時期に土製支脚が地域限定で使用され、古墳前期後半から中期に断絶するのか」といった点を考える必要が改めて生じてきた。本論では、この問いに答えるために土製支脚各小形式の関係性を読み解くことから始めたい。

2. 土製支脚の分類と使用の痕跡

筆者は弥生前期末から古墳前期にかけて形式を判別できる 4000 個体以上の土製支脚を収集した。この収集をもとに分類を行い、資料調査を通じて得た被熱痕の所見を中心に論述したい。

（1）分類と各小形式の関係性

土器をどのようにして支えたのかという点を重視して、以下のように大別をしよう（図 1）。
筒形支脚 筒状で、左右対称な器形を有し、土器底部を上方にのせる支脚。受部の形状によって、A～C に細分することが可能である。

筒形支脚 A は、土製支脚各形式の中で最も出土数が多く、左右対称の器形をもつ。大小のサイズがある。その出現は弥生前期末にさかのぼり、古墳前期前半まで製作された。北部九州に特有の器台であり、四国西北部まで分布する。松山平野では、平田七反地遺跡 d-2 区 SK2（図 1-1）など、ユビオサエによって仕上げた粗雑な筒形支脚 A が出土している。文京遺跡 2 次 SB5（栗田 1992）など、弥生後期後半には外面をハケ調整によって丁寧に整えているものがあるが、ユビナデ痕が明瞭にみられ、粗雑な印象を受けるものが増加する。

筒形支脚 B は口縁部が内湾するものであり（図 1-2）、C は「U」字状の挟りをいれる（図 1-3・4）。両者ともに後期前半に出現し、後期後半から古墳時代前半にかけて盛行する。製作技法に注目すると、筒形支脚 C には粗雑なものがあり、福音寺筋違遺跡 SB 5 資料（図 1-4）は外面にユビナデ痕が顕著であり、受部が丁寧に整形されていない。

台形支脚 台形で 1 個体、または 2、3 個体の受部で土器底部を受ける、と考えられるもの（図 1-5～10）。中実で頂部が平坦な A（5・6）、わずかに凹む B（7）、中空で頂部が凹む C（8・9）、斜面となる D（10）に細分できる。台形支脚 D は北部九州の弥生後期後半から出土数が増加する（図 1-10）。この時期は筒形支脚の小形品が激減する時期にあたり、器高や製作手順からみた変化から考えて、小形の筒形支脚をベースに受部をつくりだした可能性が高い。

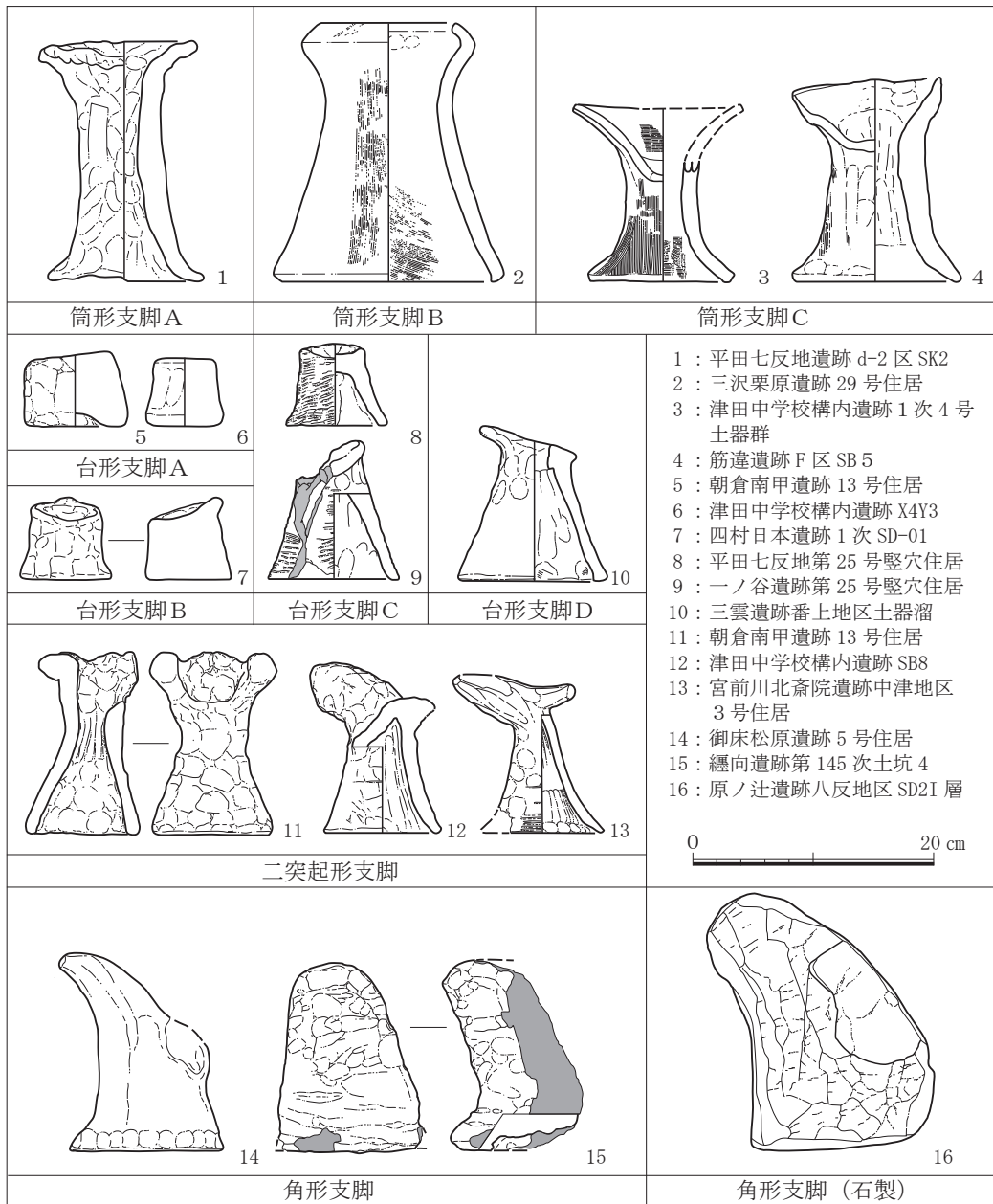


図 1 土製支脚の小形式

粘土台のような台形支脚 A（図 1－5・6）、B（7）は、出土数が少なく、弥生後期後半にわずかにみられるのみである。

二突起形支脚 筒状の体部を持ち、2つのユビ（突起）を有するもの（図 1－11～13）。弥生時代終末期から古墳時代前期のものは、体部が中空である。背面に突起を有するものがあり、

位置調整で用いられたと考えられる。浮かせる、支えるといった用途が推定できる。

二突起形支脚は、製作技術の点から筒形支脚Cから派生した（山内 2001）。11 は、過渡期の資料である。体部上半が中空で、突起部がつくり出されている。弥生終末期に、二突起形支脚は頂部に粘土を充填し、突起を付け足す製作工程に変化し、一般的となる（12・13）。

角形支脚 中空である他の支脚と異なって、粘土塊を単角形とした中実の支脚である（図 1－14・15）。2、3 個体を組みあわせて、土器体部下半を持ち上げるように支える。壱岐では石製の角形支脚（16）が弥生後期後半から多用され、この形式の土製支脚はこの模倣形と考えられる。土製の角形支脚は弥生後期後半に出現し、弥生終末期から古墳前期前半である。ただし、他の支脚に比べて出土点数が 91 個体と少ない。

土製支脚の使用時期 弥生後期後半から終末期が支脚の出現期から盛行期であり、古墳前期後半には衰退する。弥生終末期は支脚各小形式が併存している時期であり、これは後述するように支脚に地域色が認められるためである。衰退期は、古墳前期前葉から中葉（布留式古段階新相から中段階）であり、一部、角形支脚がみられるが、土製支脚各小形式は姿を消す。

このことは古墳中期前葉（須恵器型式でいう TG232 型式期以降）以降、普及する造付けカマドの定着以前には、すでに土製支脚は使用されていないことを物語る。ゆえに土製支脚をもって炉からカマドへの過渡的な資料とは評価することはできない。カマドの受容は韓半島南部から渡来した集団やその生活様式の影響といった外的な要因を想定すべきである。

（2）土製支脚の被熱痕跡

土製支脚はすべてが加熱調理に用いられたものなのであろうか。調理補助具として考えられてきた土製支脚であるが、疑問がもたれているものがある（杉井 2004）。そこで被熱痕を実見した 207 点の資料を中心に土製支脚各小形式の用途について考えたい。

まず筒形支脚Aは、実見したところ、被熱していないものが多い。そのため調理補助具ではなく、器台としての用途が考えられる。ただし、弥生中期末には福岡市那珂遺跡 40 次 SU26 下層資料（山崎 1994）など、粗製で全面に被熱したものがある。筒形支脚Bは甘木市平塚遺跡群出土資料（隈部 1996・2006）など被熱が認められない。筒形支脚Cは、北九州市十双遺跡など被熱している資料が報告されており（井上ほか 1979）、筆者も松山市津田中学校構内遺跡例（梅木 2001）に被熱痕を確認している。ただし、北九州市上徳力遺跡（梅崎・栗山 1989）、上清水遺跡（柴尾 1993）、豊中市穂積遺跡（柳本ほか 2004）出土資料など、被熱していない資料が半数程度確認できた。したがって器台と調理補助具という 2 つの用途がうかがえる。

台形支脚は被熱を受けたものと受けていないものがある。図 1－6 など受部が凹んでいる台形支脚は被熱している個体の比率が高い。被熱痕跡よりこの支脚は土器を持ち上げるという用途より、甕が倒れないように下から支えることが主目的であったと推測できる。

二突起形支脚は、松山市宮前川遺跡を中心に 71 個体を実見したが、被熱したものが 8 割を越す。突起部先端には赤変部分が認められ、これは突起部で最も加熱される底部や体部下半を支えていることによる。松山市福音寺遺跡では炉から二突起形支脚が出土したことが報告されており、調理補助具としての用途が補強される。興味深い資料としては、松山市樽味四反地遺跡第 18 次遺跡 SB01（橋本・大西 2010）がある。この住居床面では二突起形支脚と台形支脚が使用時の状態を保ったまま出土した。ここでは台形支脚に小型鉢をのせ、口縁端部を二突起形支脚の支手が横から支えた状態で検出されているが、周囲に焼土はなく、また土器外面にススが付着していない。器台としての用途もあわせて考えておくべきである。

角形支脚は、被熱痕が明瞭に観察できる個体がほとんどである。桜井市纏向遺跡出土資料（図 1 - 15）や福岡市西新町遺跡（重藤ほか 2000、岡寺ほか 2005）など、前面が赤変、背面が黒く煤けている資料があり、調理補助具である。15 は背面が生焼けとなっており、1 個体の土製品としてしっかりと焼成されておらず、便宜的につくられたという印象をもつ。

以上、被熱痕に注目した結果、調理補助具が主目的であった土製支脚は二突起形支脚、角形支脚であり、次に台形支脚が候補にあがる。一方、筒形支脚は器台としての性格が推定できる。もちろん土器の形式は単一の機能や用途に限定されるものではないが、筒形支脚 A が伝播する中で、調理補助具に機能変化していくといったことも想定できる。そこで次に、章をあらためて、弥生後期後半以降の土製支脚各小形式の分布を確認していこう。

3. 土製支脚の分布と二突起形支脚、角形支脚の系譜

弥生時代後期後半から弥生時代終末期 この時期に筒形支脚 A の分布域が北部九州から瀬戸内西部に広がる（図 2 左上）。なお筒形支脚 B の分布は旧国でいう筑前、筑後、肥前を中心とする。小郡市三沢栗花遺跡（中島 1985）や朝倉市平塚川添遺跡（川端・吉武 2001）など、福岡県中央部に位置する遺跡からの出土が最も多い。弥生時代後期前半までは北部九州にのみ分布をしていたので、分布域の拡大とともに地域色が生じたといえよう。

筒形支脚 C は九州北東部から西部瀬戸内にかけて分布する（図 2 右上）。分布の核は上徳力遺跡など旧国でいう豊前である。西部瀬戸内の松山平野ではユビナデ痕が明瞭な粗雑な筒形支脚 C が多く、豊前のものとは製作技術の点で異なる。

受部が凹むものや粘土台のような台形支脚 A・B・C は、西部瀬戸内や高知県に分布する。台形支脚 D は、北部九州から四国西部を中心に分布し、北部九州に類例が多い。

以上のように筒形支脚、台形支脚の受部形状にあらわれた差異は地域差であることがわかる。**弥生時代終末期から古墳時代前期前半** この時期、筒形支脚各小形式、台形支脚の分布域は後期後半から変化がない。そこで二突起形支脚と角形支脚に目を向けてみたい。

二突起形支脚は北部九州から四国、山陽、山陰、近畿地域と広域に分布する（図2左下）。分布の核は、愛媛県、山口県を中心とする西部瀬戸内であり、松山平野では、宮前川遺跡や津田中学校構内遺跡などで400点を超える土製支脚が認められる。

二突起形支脚は、北部九州では雀居遺跡（松村ほか2000）や同吉塚遺跡（池崎ほか1989）、山陽では津寺遺跡（大橋ほか1995、亀山ほか1996、亀山・大橋ほか1997、高畑・中野ほか1998）、山陰では米子城下（杉谷ほか1994）、近畿では纏向遺跡（石野1974）や池島・福万寺遺跡（廣瀬ほか2007）より数点の出土事例がある。当該期は他地域の土器が移動する時期にあたるので、西部瀬戸内からの人の動きにかかわる資料としても評価できよう。

一方、角形支脚は集中的な分布をみせる地域がないという点で、他の土製支脚と異なった分布傾向がある（図2右下）。北部九州から瀬戸内、近畿にかけてみられるが、分布の比較的集中する北部九州でも、各遺跡の出土点数に注意すると10点以上出土する遺跡はない。

先述したように壱岐では石製の角形支脚が多用されている。角形支脚は石製支脚の材質転換と理解できよう。角形支脚がほかと異なり、粘土塊から成形することはこうした系譜の違いがあらわれているのである。そして、角形支脚の盛行期である弥生終末期から古墳前期前半は、a) 列島各地の交易拠点の最盛期にあたり、b) 地域単位で甕底部の尖底や丸底が進行し、さらに各地の土器が移動しているという現象がある。加工するに手頃な石材を入手できなかった壱岐の人々、故地と異なる甕で調理を行おうとした交易民・移住民にとって、製作に簡単で、便利な土製の角形支脚が用いられたと推定したい。

土製支脚出現にみる2つの流れ 以上のように分布を把握すると、土製支脚には2つの流れがあることがわかる。1つの流れは、北部九州に由来する筒形支脚を祖型とし、その変容から生れてきた二突起形支脚である。いま1つの流れは壱岐島の石製支脚を元祖とし、交易網の結節点で便宜的に使用された角形支脚である。

筒形支脚の分布拡大と変容にはどういった背景が考えられるだろうか。弥生後期には、複合口縁壺など九州北部地域に特徴的な土器の一部が西部瀬戸内に出現し、同時に在地化がすすむ（田崎1995）。ここには北部九州と四国北西部の頻繁な人々の往来や直接的な接触が恒常的に保たれているという。筒形支脚の受容は、複合口縁壺と同様に、北部九州系土器の一部の伝播として理解でき、さらに在地化が生じる地域間関係が反映している。

二突起形支脚は、在地化の先にある変容と同時期に進行した煮炊器の地域的変化が絡み合っただけで出現した。伊予では、弥生中期後半に特徴的な脚台付甕は、後期前半に平底化し、後期後半には平底が主体となり、終末期には尖底になる（大久保1996）。後期後半に筒形支脚Cや台形支脚A・Bが増加し、弥生終末期に二突起形支脚が成立することは、甕形状の変化の土製支脚の使用が呼応していることをあらわしている。

なお小林正史は本論でいう二突起形支脚と台形支脚を、蒸らし時において傾けた姿勢でオキ

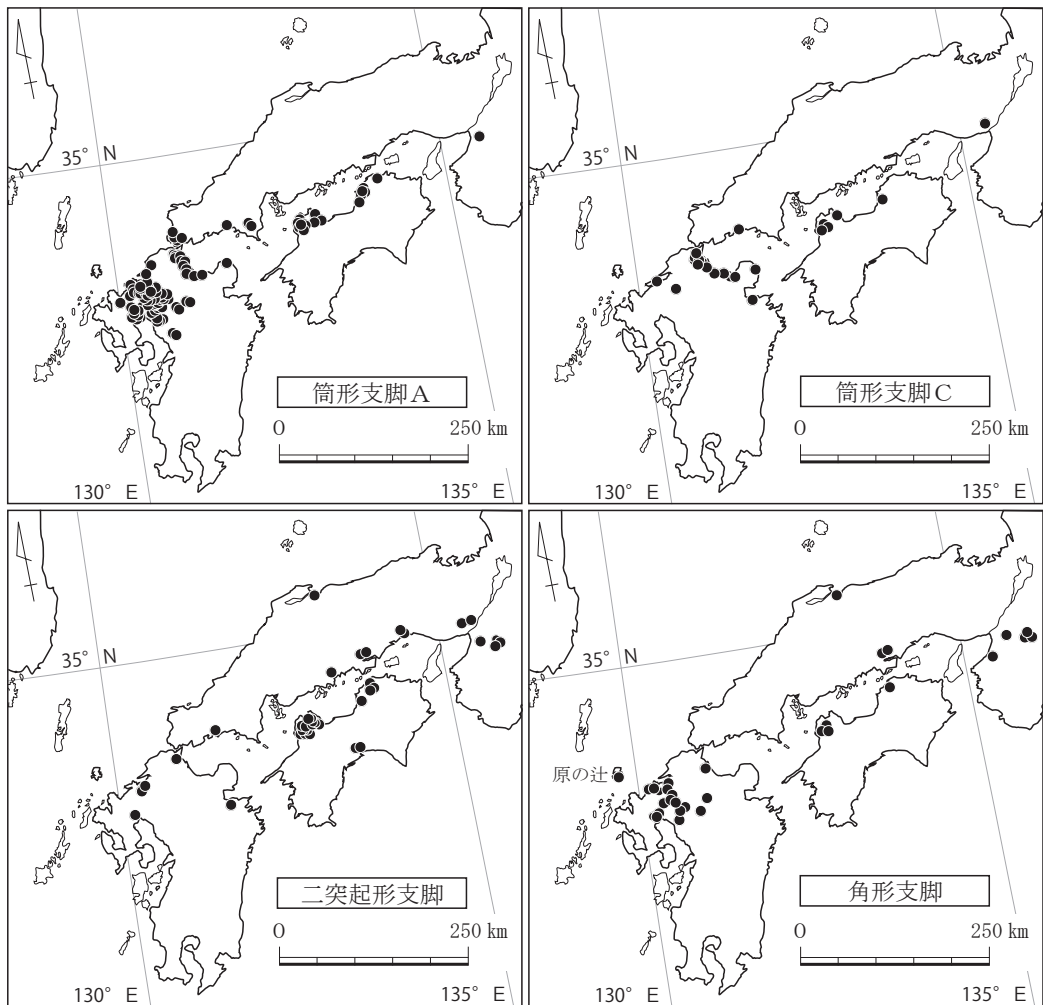


図2 土製支脚小形式の分布

火の上に置かれた甕を支える「つつかえ棒」支脚と読み解く（小林 2022）。しかし、台形支脚A・Bは型式学的には脚台から派生したために底部を支えることが主である。また二突起形支脚は甕胴下半分を支えていたという使用痕跡を筆者は甕形土器から観察しているので、傾けて支えたものが主であったとはいえない。

地域特有の調理用土器と饗宴 重要な点は、二突起形支脚と台形支脚が地域独自の調理補助具であり、それは器台としての性格も具有していることである。日常的な調理に加え、飲食を伴う、あるいは飲食を象徴する儀礼の道具としても位置づけられる。

いまの議論において「非日常的な共飲共食儀礼」と定義できる饗宴は有効な視座を提供する。饗宴は、共飲共食によって同質性や平等性を強調することで、これを政治的な紐帯に利用できるという（Hayden 2014）。この現象は、弥生終末期における各地の墳丘墓や拠点集落での祭祀

域で確認でき、地域独自の煮炊器と供膳器はそれを具現化したものと読み解ける。

古墳前期における布留式土器群の成立と波及は、地域独自性を後退せしめ、古墳時代土器様式は広域共有と中心一周辺関係がその特質となる。便宜的に使用された角形支脚もまた、西日本において甕の地域性が喪失するとともに役目を終えた。各地で「競覇的な饗宴戦略」がとられた弥生終末期から、列島広域での「紐帶的・統合のための饗宴戦略」に革新されるのである。このような理解にたったとき、土製支脚は古墳出現前夜という限られた時期の饗宴を示す一事例として、きわめて特徴的な考古資料であるように思われるのである。

おわりに

日本列島の土製支脚は時期的にも、地域的にも限定される土製品である。本論では、弥生終末期の地域間関係と交流を反映した、地域色ある調理方式に関わる考古資料として評価した。

しかし、こうした地域独自の土製支脚は古墳時代前期後半には失脚する。古墳出現とともに はじまる紐帶的・統合のための饗宴は、一面では地域特有の調理補助具を否定した。土製支脚が有する時期・分布の限定性は、こうした歴史の徒花として評価できるのである。

謝 辞

本論は2005年度に大阪大学文学部に提出した卒業論文をもとに再構成したものである。大学院生時代に福永先生より論文投稿を薦めていただいたが、できないままになっていた。10年越しの提出となってしまったことを先生に深くお詫び申し上げますとともに、本記念論集で献呈をさせていただきたい。

なお、資料調査にあたっては以下の機関にご配慮いただいた。朝倉市教育委員会、愛媛県教育委員会、愛媛大学埋蔵文化財調査室、大阪府文化財センター、小郡市教育委員会、北九州市埋蔵文化財調査室、桜井市埋蔵文化財センター、兵庫県教育委員会、豊中市教育委員会、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会、松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター。末筆ながら、記して御礼申し上げます。

引用・参考文献

【日文】

- 岩橋孝典 2004「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について（2）一甕の検討及び甕形土器、土製支脚の使用痕・被熱痕分析」『古代文化研究』第12号 島根県古代文化センター、島根：pp. 29-53
- 梅木謙一 2001「伊予中部の土器」『庄内式土器研究』XXIV 庄内式土器研究会、大阪：pp. 113-132
- 大橋信弥 1979「支脚形土製品の系譜」『古代研究』17 元興寺文化財研究所考古学研究室、奈良：pp. 21-36

- 大久保徹也 1996「中四国地方の弥生土器煮沸形態と煮沸補助具—弥生Ⅱ期～終末期の様相—」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム、愛知：pp. 101-112
- 小林行雄 1941「土製支脚」『考古学雑誌』第31巻第5号 日本考古学会、東京：pp. 28-50
- 小林正史 2022「弥生時代から中世への主食調理方法の変化とその背景としての米品種交替仮説」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第15号 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部、石川：pp. 57-80
- 杉井 健 2004「土製支脚研究序論」『先史・古代東アジアの植物遺存体 先史・古代九州出土植物遺存体に関する実証的研究』2 熊本大学文学部、熊本：pp. 213-222
- 田崎博之 1995「瀬戸内における弥生時代社会と交流—土器と鏡を中心として—」『瀬戸内地域における交流の展開古代王権と交流6』名著出版、東京：pp. 29-59
- 西川卓志 1983「弥生時代の煮沸形態とその変遷」『関西大学考古学研究室開設参十周年記念考古論叢』関西大学考古学研究室、大阪：pp. 773-788
- 藤井純夫 1983「西アジアの土製支脚・支脚形土製品」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』VOL. 3 岡山市立オリエント美術館、岡山：pp. 45-73
- 深澤芳樹 1995「おこげのあと」『文化財論叢』Ⅱ 奈良国立文化財研究所、奈良：pp. 11-18
- 山内英樹 2001「四国の支脚型土器」『庄内式土器研究』XXV 庄内式土器研究会、大阪：pp. 1-28

【中文】

- 浙江省文物考古研究所（編） 2003『河姆渡 新石器時代遺址考古発掘報告（上・下）』文物出版社、北京

【英文】

- Hayden, B. 2014. Feasting in Early States and Empires. *The Power of Feasts: From prehistory to the present*. Cambridge University Press. New York. pp. 206-346.
- Skibo, J. M. 2003. *Understanding Pottery Function*. Springer: New York.

遺跡文献

- 福岡県／平塚遺跡群：川端正夫・吉武孝礼 2001『平塚川添遺跡』Ⅰ、隈部敏明 1996『平塚山の上遺跡』Ⅰ、隈部敏明 2006『平塚山の上遺跡』Ⅱ 甘木市教育委員会 上徳力遺跡：梅崎恵司・栗山伸司 1989『上徳力遺跡』1 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財発掘調査室 上清水遺跡：柴尾俊介 1993『上清水遺跡Ⅰ区』、佐藤浩司 1995『上清水遺跡Ⅲ区』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財発掘調査室 十双遺跡：井上裕弘ほか 1979『福岡県築上郡築城町所在十双遺跡の発掘調査』福岡県教育委員会 那珂遺跡：山口譲二ほか 1991『那珂』5、山崎龍雄 1994『那珂遺跡』福岡市教育委員会 西新町遺跡：折尾学ほか 1982『西新町遺跡』福岡市教育委員会、重藤輝行ほか 2000『西新町遺跡』Ⅱ、岡寺未畿ほか 2005『西新町遺跡』Ⅵ 福岡県教育委員会 雀居遺跡：松村道博ほか 2000『雀居遺跡』5 福岡市教育委員会 吉塚遺跡：池崎譲二ほか 1989『吉塚』1 福岡市教育委員会 三沢栗花遺跡：中島達也 1985『三沢栗花遺跡』Ⅲ・Ⅳ 小郡市教育委員会

岡山県／津寺遺跡：大橋雅也ほか 1995『津寺遺跡』2、亀山行雄ほか 1996『津寺遺跡』3、亀山行雄・大橋雅也ほか 1997『津寺遺跡』4、高畑知功・中野雅美ほか 1998『津寺遺跡』5 岡山県教育委員会

愛媛県／宮前川遺跡・古照遺跡：作田一耕 1998『斎院・古照』愛媛県埋蔵文化財調査センター 津田中学校構内遺跡：梅木謙一 2001『斎院の遺跡』Ⅱ 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 樽味四反地遺跡：橋本雄一・大西朋子 2010『樽味四反地遺跡—17次・18次調査—』松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 筋違遺跡：栗田茂敏ほか 1996『福音寺地区の遺跡 筋違C・D・E・F・G・H・I・川附』松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 文京遺跡：栗田茂敏 1992『文京遺跡』愛媛大学、田崎博之 2004『文京遺跡』Ⅲ、吉田広 2009『文京遺跡』Ⅵ愛媛大学埋蔵文化財調査室

鳥取県／米子城下：杉谷愛象ほか 1994『米子城跡』2 米子市教育委員会（米子城跡発掘調査団）

大阪府／穂積遺跡：柳本照男ほか 2005『新修 豊中市史』第4巻 考古 豊中市史編さん委員会 池島・福万寺遺跡：廣瀬時習ほか 2007『池島・福万寺遺跡3』大阪府文化財センター

奈良県／纏向遺跡：石野博信ほか 1976『纏向』桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所、福辻淳ほか 2006『平成17年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

挿図出典

図1：以下の資料を筆者トレース

1. 平田七反地：西川真美ほか 2000『道ヶ谷古墳 池の奥遺跡 平田七反地遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター 三沢栗原遺跡：福岡県教育委員会 1985『三沢栗原遺跡 その3』
3. 津田中学校構内遺跡：梅木 2001 前掲 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
4. 筋違遺跡：栗田ほか 1996 前掲
5. 朝倉南甲遺跡：谷若倫郎ほか 1986『朝倉南甲遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
6. 津田中学校遺跡：梅木 2001 前掲
7. 四村日本遺跡：谷若倫郎・吉田泰之 1998『四村日本遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
8. 平田七反地：西川ほか 2000 前掲
9. 一ノ谷遺跡：西岡達哉ほか 1990『一の谷遺跡群』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
10. 三雲遺跡：柳田康雄・児玉真一 1982『三雲遺跡』Ⅲ 福岡県教育委員会
11. 朝倉南甲遺跡：谷若ほか 1986 前掲
12. 津田中学校構内遺跡：梅木 2001
13. 宮前川北斎院遺跡中津地区：作田 1998 前掲
14. 御床松原遺跡：井上裕弘 1983『御床松原遺跡』志摩町教育委員会
15. 纏向遺跡：福辻ほか 2006 前掲
16. 原ノ辻遺跡：藤村誠・中尾篤志 2003『原の辻遺跡 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書』長崎県教育委員会

図2：筆者作成